Natsume Souseki × Ikuta Choukou

夏目漱石と生田長江

明治36年、長江は東京帝国大学文科の哲学科に入学します。この頃、長江は同級生らと回覧雑誌『夕づゝ』（後に『花雲珠』に改題）を編集していました。そこへ、夏目漱石が英国から帰国したことを聞き初めて講義を受講。これがきっかけで漱石のもとを訪ね交流するようになります。

帝大卒業後、長江は評論家として名を上げていきます。明治40年には漱石が序文を担当した『草雲雀』『文学入門』を発表、刊行には漱石の力が大きく働きました。

しかし明治43年、長江の執筆原稿掲載をめぐり、両者の間に亀裂が入ってしまいました。長江は漱石についてたびたび論じていますが、『夏目漱石論（41年）』では「夏目先生位貫※目のある人は少なからう」、『夏目漱石氏を論ず（45年）』では「思想家としての偉大を認めることは出来ぬ」と、この一件の前後で正反対の評価をしています。

※貫目…威厳、重み

【参考】

『知の巨人　評伝生田長江』

『郷土出身文学者シリーズ6　生田長江』

生田長江（いくたちょうこう）

評論家・翻訳家 明治15（1882）年～昭和11（1936）年

日野郡根雨村貝原（日野町貝原）に生まれる。本名弘治（ひろはる）。

上田敏らの『芸苑』に参加し、「長江」のペンネームを贈られる。翻訳家として、ニーチェを日本で初めて本格的に紹介したほか、当代の作家を論じる文芸批評家、社会批評家として活躍。また、山川菊枝、佐藤春夫や鳥取出身の生田春月、伊福部隆彦などを育てた。

女性問題への関心も高く、平塚らいてふに女性による文芸雑誌発行を勧め、『青踏』と名づけるとともに、男女の差異を論じる「ジェンダー」の視点を提起した。

◆代表作『ツァラトゥストラ（翻訳）』『ニイチエ語録』『超近代派宣言』

【肖像写真】個人蔵

夏目漱石（なつめそうせき）

小説家・英文学者 慶応3（1867）年～大正5（1916）年

江戸（現在の東京都）に生まれる。本名金之助(きんのすけ)。

東京帝国大学を卒業後、東京と愛媛の教員を歴任。この頃松山の俳句会「松風会」にも参加し、俳句に力を入れる。

明治33年（1900年）に留学のためイギリスへと出発し、明治39年（1906年）帰国。帰国後は帝大の講師を務め、その傍ら高浜虚子のすすめで「吾輩は猫である」を『ホトトギス』に発表し話題となる。明治40年（1907年）には教職を辞し朝日新聞社に入社、以後も作品を発表し続けた。

◆代表作『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『それから』

【肖像出典】「新文芸読本　夏目漱石」（河出書房新社）　【参考】『四国近代文学事典』

Ooe Kenji × Ikeda Kikan

大江賢次と池田亀鑑

亀鑑は鳥取県師範学校を卒業後、大正5年溝口尋常高等小学校に教員として赴任しました。大正7年に退職するまでわずか2年間の勤務でしたが、教え子たちから厚く慕われていました。

勤務2年目、亀鑑は尋常科6年の担任を任されます。その時の教え子の一人が大江賢次でした。賢次たちは、亀鑑の本名が「かめのり」であることから〝浦島太郎先生〟とあだ名をつけ慕っていたようです。

亀鑑の「教えるのではなく、生徒たちとともに学ぶ」という革新的な姿勢に、当初賢次は圧倒されます。しかし、もともと文章を書くことが得意だった賢次は亀鑑の教えを受けながら、一層文学の魅力に取りつかれていきました。

後に、賢次は亀鑑について「わが生涯の、運命のカーブを描くべき、なんらかの道しるべを示してくれた人」と回想しています。

【参考】
『故旧回想』
『大江賢次　生誕100年特別展』
『郷土出身文学者シリーズ8　池田亀鑑』

池田亀鑑（いけだきかん）

国文学者 明治 29（1896）年～昭和 31（1956）年

日野郡福成村大字神戸上村（日南町）に生まれる。本名龜鑑（かめのり）。

東京帝国大学国文科を卒業後、雑誌『婦人世界』の編集長を務めながら古典文学の研究を続ける。やがて東大助教授、教授を歴任。文学博士。

平安朝文学研究の権威であり、『校異源氏物語』全 5 巻（1942 年）、『源氏物語大成』全 8 巻（1956 年）をまとめるなど著書は 100 冊を超え、源氏物語研究の基礎を築いた研究者として広く知られている。

◆代表作『宮廷女流日記文学』『平安朝の生活と文学』『古典学入門』

【肖像出典】「郷土出身文学者シリーズ⑧」鳥取県立図書館／編集・発行

大江賢次（おおえけんじ）

小説家 明治 38（1905）年～昭和 62（1987）年

日野郡溝口町（伯耆町）に生まれる。

小作農の家に生まれ、小学校を卒業後は農業やトンネル工事などに従事。進学の道は絶たれたが、村の俳句サークルに参加するなどの活動を続けた。

昭和 2 年（1927 年）に上京。武者小路実篤(むしゃのこうじさねあつ)（1885 年～1976 年）の玄関番となり、同世代の文学者と交流。満州旅行をもとに書いた小説「シベリア」が『改造』で 2 席となり、以後は作家として活躍する。昭和 33 年（1958 年）鳥取県が舞台となった『絶唱』は映画化されるほどの大ヒットとなった。

◆代表作『絶唱』『望郷』『アゴ伝』

【肖像出典】「創刊 100 年三田文学名作選」三田文学編集部／編　【参考】『大江賢次　生誕 100 年特別展』